
深夜

村上 悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深夜

【Nコード】

N3466S

【作者名】

村上 悟

【あらすじ】

深夜に私は歩く。消えない痛みを抱いて。

愛とは何かを問い掛けたい気分だ。私の中に込み上げてくるものがそう訴えかけている。

二歩、三歩と前に進み、そこで立ち止まる。家から三歩、だから散歩なんてくだらないことは言わない。ただそこで、込み上げてきたものが止まらなくなったのだ。

声が漏れないように手で口を塞ぐ。しゃくり上げる喉を空いた方の手でつかむ。物理的な苦しみが嬉しい。

その場にいられずにさらに足を進める。後ろを振り返る。灯りは消えていた。安心と不安が緋い交ぜになる。これはどちらの兆候？ 膝の震えが先に進めと命じている。とりあえず腰を下ろせる場所まで行こう。思いついたのは公園だった。暗闇に紛れて、思い切り高笑いしてやるんだ。私の決意は固かった。目標を定めることが、今一番の薬なのだと信じていた。

側溝を一枚一枚、丁寧に踏みながら歩く。シシオドシのような空っぽの音が、夜空に鳴り響く。リーダーはいつでも精細だ。十年間のロックオンで逃げ場がないことは承知している。逃げる必要はない。逃げられない。逃げたくない。私は何を望んでいるというのだろうか。

街灯は定期的に私を照らしていた。その度に裸にされた気がして、胸元を両腕で抱える。そんなとつさの行動に、自問自答する。

「他に隠すところがあるんじゃない？」

「それはこの真っ赤なほっぺたのこと？」

自答するつもりが自問自問になってしまふ。問いかけはいつまでも続く。

「どうして隠さなくちゃいけないの？」

「恥ずかしいとは思わないの？」

「誰も見ている人なんていないのに？」

誰も見ている人なんていなかった。私は一人だった。

ブランコに座るのは遠慮した。あれに乗ると子供は喜ぶが大人は死にたくなる。それにスカートではいかにも具合が悪い。誰も見ていないのだが。

代わりに滑り台の上に登った。私の視界を遮るものはなかった。

全てが見通せると知ったとき、私の全身はレーダーになった。策敵発見後は直ちに離脱せよ。内なる声はそう言っていたが、あの男の姿を見た瞬間、体の全てが機能停止することは分かりきっていた。

夜風が頬に沁みる。熱さを感じていた分、気持ち良くはある。だけど、その分、痛みも増していた。

自問自問している間に、涙は枯れていた。こちらら年季が入ったんだ、泣いてばかりもいらねえんだよ。また自分の中の誰かに説教している。私は一体誰なんだ？

考えるのが嫌で、滑り台を滑り降りる。わざわざ滑り降りるってしとかなないと、近頃の子供は走って降りたりするから困る。

靴が滑り台の足元の砂場に埋まった。裸の足裏に小さな石の感触がこそばゆい。視線は頭上を向いていた。できるだけ視界を狭くしたかった。天上は闇だ。闇は天井と同じだ。何も見ずに済むが、そこには豆電球が灯っていた。

違う、月だ。ぼんやりと、天上に溶け込むように広がっている。折りしも流れ星が月の辺りから地上へ向かって流れていった。あの紐を引っ張ると、電球は消えてしまうのだろうか。

流星は願いを叶える前に消えてしまった。月を消し去る方法は永遠に失われてしまった。しまった、ぜひと頼みたいことがあったのに。

月だ。

私の頭の中が、その言葉で埋め尽くされてしまった。

月だ。月だ。月だ。月だ。月だ。月だ。月だ。月だ。月だ。

月だ。月だ。月だ。月だ。月だ。月だ。月だ。月だ。月だ。

月だ。月だ。月だ。月だ。月だ。

コピーアンドペースト。世の中楽になったものだ。だからこそ傲慢な考えを持つ人間が増えて困る。そう、例えば滑り台を走って降りるような。

今の私を、どこかの誰かにコピーアンドペーストできないだろうか。

傲慢な考えを持つ誰かに捕まらないように。

月が私の頭を埋め尽くす。おどけていられなくなる。妖精のように消えてしまうことも、少年漫画の主人公みたいに強くなることもできない私はどうすればいい？

消えてしまえ月よ。そうすれば私は逃げていられる。永遠に隠れていられる。

できないのならば。

できないのならば……。

靴を脱いで砂を落とす。丁寧に、一粒も残らないように。背中は上手く叩けなかった。飛び跳ねて、落とせないかと試してみる。跳ねる度に頬が痛んだ。ちよつとやさつとじゃ、消えない痛みだった。

公園を出る。また私は側溝を一枚一枚踏みながら歩いていく。家の灯りは消えたままだった。だけど、玄関だけは明るかった。

私には、それが月のように思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3466s/>

深夜

2011年10月8日06時25分発行